

# 夜明け前より瑠璃色な

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック  
2010年新春号

オーガスト最新作  
制作発表



# P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

今回の小冊子では、大変長らくお待たせしておりましたオーガスト最新作についての情報をお出しすることができました。まだまだ第1報までいかない「第0報」ではありますが、ご興味をお持ち頂ければ幸いです。

またマリン・エンタテインメント様のサイトでFAのウェブラジオ「修智館学院出張生徒会」の放送が続いています。この小冊子が配布される2009年末のコミケ77では、出張生徒会のCDもマリン様のブースで発売されるようですので、お聞き逃しの方などがいらっしゃいましたら如何でしょうか。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2009年末 オーガスト/ARIA 拝

## CONTENTS

- 3 …… オーガスト最新作情報
- 7 …… 『FORTUNE ARTERIAL』ショートストーリー  
雪丸物語
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき

**FORTUNE ARTERIAL**  
—フォーチュン アテリアル—



この都市は、あらゆるものが不条理に彩られている。

例えば———そう。

# オーガスト最新作

タイトル未公開

2010年初頭 情報公開予定

シナリオ・榊原拓<sup>ほか</sup> / 原画・べっかんこう

For Windows2000/XP/Vista/7

18歳未満の方はご購入になれません。

祭壇に祈る聖女、  
穢れを見下し生きる翼。

不思議な悲劇だった。

家族も、友人も、嫌いだっただ男も、ちよつ

と気に入っていた女も、金持ちも貧乏

人も、善人も悪人も、一切の区別なく、

はるか彼方の大地へと落ちていった。

火災や殺人のように、死体が残ったり

はしない。崖から下を眺めても、見える

のは薄い雲と黒い混沌に覆われた大地

だけ。家屋の残骸すら認めることはで

きなかった。

そのせいだろう。

幼い日の俺は、自分が全てを失ったこと

を信じられず、ただ呆然と座り込んで

いただけだった。

## 大崩落。

それは都市の姿をも一変させた。

元々、この都市には、貴族が住む上層と

一般民が住む下層という2つのエリア

しかなかった。だが、崩落に伴う地震で

下層の一部が地盤沈下し、もう一段低い

エリアが生まれた。

roduction

# AUGUST New Product

掃き溜めの路地裏 - 打ち捨てられた瓦礫からは、鉄錆に似た臭いが漂ってくる。



—ここ数日、この「牢獄」に  
雨は降っていない。

今「牢獄」と呼ばれている区画だ。  
名前の由来は簡単。  
断崖絶壁に囲まれ、容易に人の行き来  
ができなかったことからだ。

『牢獄』 - 大崩落によって生じた地盤の高低差は、貧富の差を生んだ。



間市 - 搾取る者とされる者の力関係は、奇妙なバランスで保たれている。



# Intr

また一人、  
少女が散る。

◆ FROM AUGUST ◆

断片的ではありますが、完全新規タイトルとしては『FORTUNE ARTERIAL』以来となる最新作情報を、今オフィシャルハンドブックにてようやくお出しすることができました。ご覧頂きました通り、既存のオーガスト作品群とはかなり異なるアプローチでお送りする形になりますが、プレイして頂いた方には必ずご満足頂ける作品になるよう取り組む姿勢はこれまでと何ら変わることはありません。今後の展開に、どうかご期待頂ければ幸いです。

## オーガスト最新作

タイトル未公開

2010年初頭情報公開予定

シナリオ・榊原拓 ほか / 原画・べっかんこう

For Windows2000/XP/Vista/7

1日課金課金の方はご購入になれません。



## 雪丸物語

安西秀明

「一面の白色だった。雪はこれでもかと言わんばかりに、上空から舞い落ちてくる。」

修智館学院の敷地内にある礼拝堂も、すっかり雪に覆われてしまっていた。

礼拝堂の側に立てられている小屋の前に、雪と同じ色の服——ローレルリングの制服——を来た少女が佇んでいる。

人形と見違えるほど整った顔立ちは、不安の色に染まっていた。

「……ゆきまる」

彼女の見つめる小屋は、からっぽだった。

そこにいるはずの『雪丸』と名付けられた白兎の姿はない。

雪に残されるべき兎の足跡は、新たに積もった雪によって消えてしまっていた。

「……こほん、こほん」

少女——東儀白は、小さく咳き込んでから携帯電話を取り出した。

——数分後。

連絡を受けてから驚くべき早さで集まった生徒会役員とOBである伊織と征一郎は、雪丸の捜索をすることにいった。

「俺と征と瑛里華が探索隊。いいね？」

千堂伊織は、金色の髪に積もった雪を指で払いな

がら言った。

「ああ」

「わかったわ」

征一郎と瑛里華が頷く。

「俺も行きます」

名前を挙げられなかった支倉孝平が一步前に出るのを、征一郎は手で制した。

「雪丸が戻ってくるかもしれない。誰かが残っている必要がある」

「白ちゃんがいるじゃないですか」

「白は風邪だ。無理をさせないようにしてくれ」

「……わかりました」

「みなさん、すみません」

白が申し訳なさそうに頭を下げた。

「お安いご用よ」

「もう会長じやないから暇だしね」

「そりゃ兄さんはね」

千堂兄妹は笑顔で歩き出す。征一郎は孝平に向けて頷いてから去っていった。

白を任せたぞ、ということだろう。

「……さて、と」

孝平は、白に振り返った。

「俺がここにいるから、白ちゃんは礼拝堂の中で待ってて」

「そういうわけには……」

「風邪が悪化しちゃうぞ？」

「それでも、みなさんだけにお任せするわけにはいきません」

「征一郎さんが心配しても？」

「すみません……でも、雪丸を待っていたいんです」

「……わかったよ。白ちゃんの頑固スキル発動だな」

「え？」



「絶対、譲らないだろう？」

「……すみません」

「はは、いいさ」

孝平の脳裏を、征一郎に折檻されるシーンが過ぎた。

まあ、それも仕方ないだろう、と諦める。

白が待つていたいというのは、雪丸に対する愛情の現れだ。

その行為を止めるのは、あまり気が進まなかった。

「じゃあ……」

孝平はダウンジャケットを脱ぎ、白の肩にかける。

「せめてこれを着て。あったかいよ」

「で、でも……」

「でもは無し。俺だつて譲らないこともある」

「……ありがとうございます」

おぞおぞジャケットに袖を通す。恋人の思いやりが嬉しいのか、白の頬は上気していた。

「あ……」

白が何かに気が付いたのか、両手でジャケットの襟を握り、くんくんと鼻を寄せた。

汗臭かったのだろうか、と孝平は不安になる。

「支倉先輩の匂いがあります……」

真つ赤になりながら、嬉しそうに上目づかいで言った。

孝平は、以前どこかで「萌え死ぬ」という謎の言葉を目にしたことがあった。

ああ、これか、と思った。

遠のいた孝平の意識を引き戻したのは、白が雪丸を必死に呼ぶ声だった。

「雪丸ー！」

孝平も白にならつて、雪丸を呼び続けた。

しばらく待つても、雪丸は現れなかった。伊織たちからの連絡もない。

「……こほん、こほん」

白はずっかり声が擦れてしまっていた。

孝平は、目を細めて、雪の中に雪丸の姿を探す。

……やっぱり見つからない。

このまま雪丸は戻つてこないのだろうか。

「雪丸は、野生に帰りたいのかもじゃないな」

「……」

白は小さな唇をきゅつと結び、悲しげな顔をした。

「ごめん、今のは忘れてくれ」

「いえ……」

白はわずかに首を振つて、降りしきる雪に視線を移した。

「支倉先輩の言う通りかもしれません」

耳が痛い程の沈黙の中、雪は降り続けている。

自然と身を寄せ合うように、白は孝平の胸にもたれかかっていた。

白はそのまま、ずっと何かを考えているようだった。

暫くして、白の唇から小さな囁きが漏れた。

「……わたしは、自分のことしか考えていないのでしようか？」

「どつしてそう思うんだ？」

「……長い話になってしまいますが」

「構わないよ」

「……わたしが雪丸に会ったのは、こちらの校舎に移った時だったんです」

「後期課程ね。去年の春か」

「はい。わたしはこんな性格ですから、初めはうまくクラスに馴染むことができませんでした……もちろん、兄さまや伊織先輩たちは優しくして下さったのです

けれど、それでも寂しかったんだと思います」

「白ちゃん、引つ込み思案だったもんね。初めてお茶会に誘った時だつて廊下でうろろろしてたし……」

「はい……」

クラスでも、同じだったわけだ。

「そんな時、雪丸に会ったんです……雪の日に怪我をしていたのを拾われて、飼い主を捜していたんですけど見つからなかったんです。わたしが会った頃はまだ、名前すらありませんでした。だから、わたしが名前をつけたんです」

白は悲しそうに眉を伏せて言った。

孝平には、その表情の意味はわからなかった。

「……雪丸は、自分と似ているなつて思つたんです。親とも本当の飼い主とも会えずに一人でいて、きつと寂しいのだから。だからきつとわたしは、名前をつければ、わたしとの繋がりが出来るつて思つたんです。でも……それは正しかったんでしょうか？」

名前をつけて、白は雪丸を大事にしてきた。

雪丸が寂しくないように。

「正しいんじゃ……ないのか？」

どんなに白が雪丸を大事にしてきたか、孝平は見えてきたつもりだ。白が悲しそうな顔をする理由が見当たらない。

「……結局わたしは、自分が寂しくないようにしてただけだったのではないのでしょうか？」

その言葉で、孝平は白の思考を理解した。名前をつけたことも、面倒を見たことも、可愛がったことも。もしかしたら、雪丸は迷惑だと思つていたのではないかと不安に思つているのだ。

有り得ないことだ。



雪丸と白をこの一年見てきた孝平は、そう思う。しかし、その言葉を本当の意味で否定できるのは雪丸だけだ。

——そして、

孝平は近くにその答えを見つけた。

「そんなことはないみたいだよ」

「え？」

近くの雪の影から、ふさふさした白兔が跳びだしてきた。

「ゆきまるっ！」

白は、兔に駆け寄る。

小さな白兔は、白のまわりをびよんびよん跳んだ。

孝平は、白に借りた兔の飼い方の本の内容を思い

出す。

あれは、嬉しがつる時の表現だったはずだ。

もしかしたら雪丸は白を探しに出たのかもしれない、と思った。

白はやつとこのことで雪丸を抱き抱えた。

「ゆきまる……ほんとに、心配したんですよ」

雪丸は、白を見つめていた。

「どこかに行っちゃうんじゃないかって……思ってた……」

震えた声は、徐々に小さくなり、消えてしまった。

白は泣きながら、雪丸をじっと見つめていた。

「……もし……本当に逃げたいのなら」

決意を秘めた声で、問いかける。

「……逃げてもいいんですよ？」

白は、そっと雪丸を抱いた手を離れた。

雪丸は、白の手から離れて雪の上を走っていく。

そして、

——ガジガジガジ。

檻の入り口を噛った。

孝平が檻を空けると、そのまま中に入っていく。

「ほらな。雪丸もここが気に入ってるんだよ」

「ぼんぼん、と白の頭に手を載せた。」

「ちよつと散歩に出ただけさ」

「……は、はい」

「よかつたな、戻ってきて」

こしこしと目を擦りながら、白は何度も頷いた。

孝平は、みんなに連絡するために携帯を取りだす。

そこで、少し気になったことを口にした。

「……もしかして、白ちゃんは今でも寂しかったりするの？」

きよとん、とした顔をして白は孝平を見つめた。

孝平の言葉の意味を理解して、柔らかい微笑みを

浮かべる。

「みなさんがいてくれるから、わたしはもう寂しく

なんてないですよ」

「そっか」

「それに、こ、恋人も……」

真つ赤になつて俯く。

自然に、そつと、触れ合った。

しんしんと降る雪のお陰で、誰にも見られること

はなかった。

白は真つ赤になつて俯く。

「風邪、うつっちゃいますよ……」

「構わないよ」

孝平は照れ隠しするように、携帯電話の通話ボタンを押した。

「……もう、大丈夫です。戻ってきました」

白は、恋人の少しだけ上ずった声を聞きながら、

檻の中で寝床を整える兔を幸せそうに見つめていた。

END



神原拓(以下神):さあ、対談の時間がやってきました!

べっかんこう(以下べ):わーわー!

神:今回の小冊子ではついに! お待たせしておりました新作の情報をお出しすることができましたね。

べ:ですね! お待たせしました!

神:まだタイトルは出せないみたいです。

べ:もう社内的には決まってるんですけど?

神:「ままだ決定!」という段階ということで、完全決定ではないと。

べ:ではそちらももう少しで出せそうですね。

神:ええ。……さて、いかがですか新作は。

べ:今回はいつもと少し雰囲気違いますよねー。

神:いやあ、少しどころかだいぶ違うと思いますよ。

べ:ファンタジーも久しぶりですね。プリホルム以来?

神:月のお姫様も吸血鬼もファンタジーと言えなくもないですが。

べ:まあファンタジー論はおいといて(笑)

神:まだお話できることは少ないんですけどね。

べ:ああ早く話したいなあ。

神:まだまだ練ってる途中のことも多いですから。慌てない慌てない。

べ:ですね。とりあえず続報をお待ちくださいーという感じで。

神:制作が進み次第、お知らせしていきますので。

べ:お楽しみに★

神:さて最近リリースされた情報と言えば……謎の『伊織の野望』です。

べ:謎ですよ。FAの移植……つてわけじゃないんですけど?

神:そうですね。移植ではないようです。

べ:なんだかちびキャラがわいわいして楽しそうなゲームになりそうなの。

神:ちびキャラいいですよなえ。トット職人さんの魂を感じました。

べ:トット絵の監修とがしましたよ。かわいいです。

神:でも『野望』ですからね。楽しいだけのゲームかどうかはわかりませんよ!

べ:というか、何もわかりませんよ!

神:私も大まかなプロットを見せて頂きました。基本的な制作は外部の方に委託してる感じです。

べ:早くプレイしたいですね。

神:楽しみです。

べ:あとは夜明けなPSP版ですね。ポーダブル。

神:こちらでも2月の発売に向けて、調整を進んでいます。

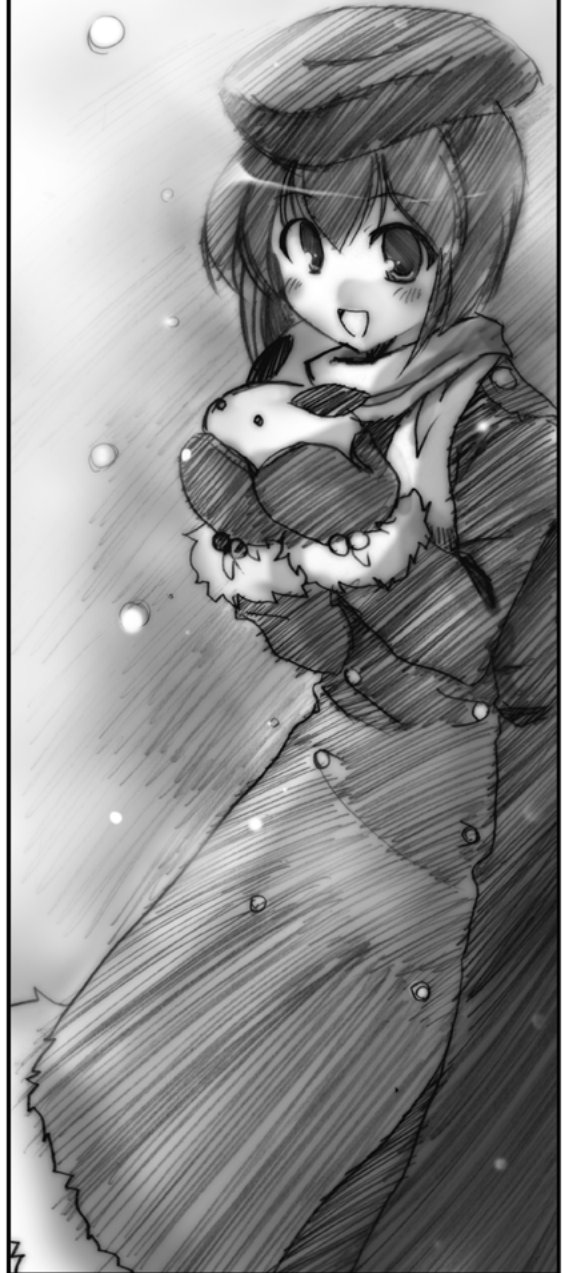
べ:なんだかとてもプレイしやすいそうじゃないですか。

神:サクサクした動きがいいですよ。年が明けた頃には正式な発売日なども出るようです。もう少しお待ち下さい!

べ:とまあ色々ありますが、僕らとしては新作の制作に集中ですね。

神:そうですね。風邪など引かないようにして頑張りましょう。

# スナック対談 第25回 べっかんこう & 神原拓



2009.12.14 21:20 社内にて

# POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。  
お楽しみ頂きましたでしょうか。

今後のオーガスト/ARIAですが、まず直近では2010年の2月25日にPSPでプレイできる『夜明け前より瑠璃色なPORTABLE』を発売致します。(内容はPS2版/「Brighter than dawning blue for PC」と同様なので、既にお持ちの方はご注意ください)  
「外出先・通勤通学時にプレイしたい!」という方や、自由に個人で使えるPCやPS2が無くてあまりプレイできないという方などにお勧めです。

また『FORTUNE ARTERIAL』では、12月上旬以降に発売された雑誌に記事が掲載されましたが『伊織の野望』というゲームの制作が主に外部の方によって進められております。外部の方ならではの柔軟な発想で、FAという素材を料理して頂ければと思っています。

こちらは私たちも(監修などはしつつも)楽しみにしておりますので、続報をお待ち下さい。

そして開発室では次回作の制作が進んでいます。

今回の小冊子で、世界の触りだけですがご紹介することができました。(秋の小冊子の後書きで書いたことが嘘にならなくて良かったです)

内部的にはシナリオもCGももっと進んでいる部分もあるのですが、まだ今後どうなるか分からない部分も多々あり、また紹介ページを見て頂ければお分りの通り「新しいことへのチャレンジ」を含んでいることから、確定情報としてお見せできることは現時点ではまだあまり多くありません。

開発室内ではクオリティの高い作品となるよう頑張っておりますので、ご期待頂ければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。

今後とも、オーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2009年末 オーガスト/ARIAスタッフ一同

## オーガストオフィシャルハンドブック

2010年新春号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!

オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>





# 夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness descend about him, and  
A fire goeth before him, and burneth up his  
The hills melted like wax at the presence of the Lord, and trembled.  
The hills declare his righteousness, and the works of his holiness  
before all the people.

## Moonlight Cradle

# FORTUNE ARTERIAL

—フォーチュン アテリアル—

オーガストオフィシャルハンドブック  
2010年新春号

